

# めくもりほっとぷれす

NUKUMORI HOT PRESS

発行 NPO法人傾聴グループ  
めくもりほっとらいん  
代表 渡邊 晴代  
〒275-0021 習志野市袖ヶ浦6-9-2  
TEL/FAX 047-451-7300  
http://www.nukumorihotline.org/  
編集責任者 吉野 秀子

## 人生の終わりをどう生きますか？

・・・ 2015年度めくもり講座開催 ・・・

2015年度の市民向け公開セミナー「めくもり講座」全4回が72名の受講者を迎えスタートした。今年も「残りの人生をしなやかに」と題して、死生学を通して自らの老いや死、終末期医療について考え、自分らしく生きるヒントを見つづけることがテーマだ。

第1回 6/6  
人生の終わりを考えるー死生学してみましよう



講師 清水哲郎氏  
東京大学大学院人文社会系  
研究科死生学・応用倫理セ  
ンター上廣講座特任教授

### 死生学とは

清水先生はまず、死生学とは哲学、宗教学、医学、社会学、芸術等、様々な分野を通して人間の生と死はどのようなものであるべきかを問う考え、死に向き合うことで死までの生き方を考える学問であると語られた。

1960年代～1970年代、死に直面している人へのケアを考える学問として、欧米で死学が生まれた。日本に入ると死生学と言われるようになった。日本には古くから生と死を一体として考える死生観があり、仏教では生死

(しようじ) と言うそう  
だ。  
次に先生は、人間にとっての死の捉え方を様々な方向から示され、死生学の世界へといざなうてくださった。

「死ぬ」ということは日本語の死ぬには二つの用法がある。

① 身体の死を指して言っている場合。医師の死亡診断などがそうだ。動いていたものが動かなくなり再び動く可能性はない。更に変質しはじめ。これは生物一般に言えることだ。

② 語られる主体が人(人格)の死であり、かつて交流のあった人が、もう目の前にはいないとか、私の父はもう死にましたなどと言ったりする場合、あの世に行ったなど、死者の世界の想定をする言い方もする。

人の死についての別の語り方もある  
古事記の中のイザナミ



とイザナギの別れは、死者が黄泉の国に存在するとの考えによる。イザナギは、黄泉の国の入り口でイザナミとの会話の後(姿無く会話だけ。今でも冥界への入り口とされる)ところでは口寄せに降りた死者との交信が可能と考える。)、黄泉の国を覗きイザナミの身体が無残な変貌を見る。この様に死についてのイメージを、身体と人格の重なりと分離として古くから捉えていた。

また、万葉集にある泣血哀慟歌(柿本朝臣麻呂)では死んだ妻の名前を呼んで袖を振る。死者に対しての呼びかけであり、残された者の祈りに通じる。現在も、墓や仏壇の前で死者に話しかけるなど、死者があたかもそこにいるかのように振る舞うことがある。

人の命の二重の見方  
この様に見てくると、人間の命は、物語られるいのち(人生)と生物学的生命(生命)が重なっていると考えられる。人生の展開のためには医療は土台である生命を整える役割を果たす。その人が豊かな人生を送るために生命を整えるというところで、生命を延ばすのが目的ではない。

私達の生涯  
《物語られるいのち》  
人間は自分のいのちの物語を創り・語りつつ生きており、他者の物語と交差する。誕生から死まで、人々のネットワークの中でダイナミックに生きる物語である。

だから人の死は人生の物語が重なる人々にとつて、自分のいのちの一部の喪失として現れる。それが物語られるいのちの世界が、身体が滅びた後も有り続けるのではないかという想いの基となっているとも言える。

死んでからのこと  
私達の文化は、死者の世界があつて死ぬとはそこに行くような語りや送

る振る舞いをするが、死者の世界を必ずしも確信している訳ではない。しかも、それで構わないと思つている。それは、人は人と人との繋がりの中で生きており、孤独は致命的だからだ。死の理解にもその事が反映されているといえる。ここでの死者の世界は既に死者の世界に行つている人びとの仲間になるということ

復活思想に於ける人の死の理解もある。「天国に行った」と「ここに眠る」の並存は矛盾しながら人の心理として自然に受け入れられている。  
また、千の風になつての歌詩のように、死者はみんな世界に溶け込んでいて、時々それを感じさせるといふ死者への捉え方もある。  
この様に私達は死について色々な考え方を同時に同居させており、それでよいと思つている。  
人間としての死を様々な角度から見つめてくると、死までの生き方をどう考えるかが見えてきた。

(文責 Y・T)